Odyssey

脊椎脊髄外科医としての私の歩み

札幌麻生脳神経外科病院　飛驒一利

本誌編集委員長の松山幸弘先生より，これまでの私の脊椎脊髄外科医としての軌跡をご紹介する機会をいただき，僭越ながらご披露させていただきます．

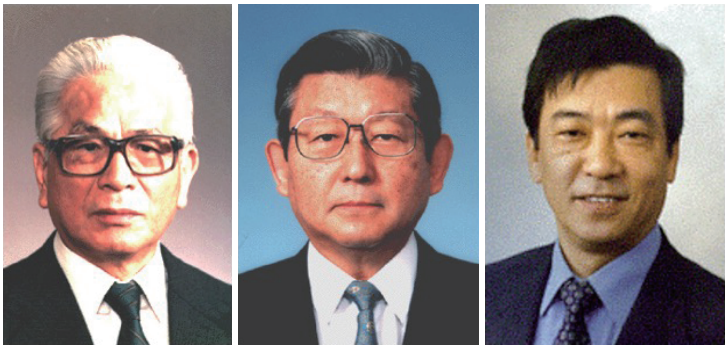
私が医師として歩み始めたのは1981年です．昭和の真っただ中で，日本が「ジャパン・アズ・ナンバーワン」などといわれている時代でした．北海道大学を卒業後，同大学の脳神経外科，都留美都雄教授のもとに入局いたしました．初代教授の都留先生は，ボストンで研修し，日本で初めて米国脳神経外科の専門医資格を取得した先生でした．米国では脳神経外科医が脊椎脊髄疾患の治療をするのが当然とされており，北大脳神経外科でも，阿部弘先生，岩﨑喜信先生と，脊髄を主たる専門とする教授のもと(**写真1**)，私は自然とSpineの道を歩むこととなりました．

1981年3月に北海道大学医学部医学科を卒業．同年6月より北海道大学医学部附属病院で脳神経外科医員として勤務し，脳神経外科学の研究に従事した．1988年12月からカリフォルニア大学デービス校客員研究員として留学，1990年に生体NMRスペクトロスコピーを研究．1991年より北海道大学脳神経外科教室にて研究生として脊髄・脊椎疾患の研究を行った．2007年に北海道大学医学部附属病院の診療教授となり，2013年10月より札幌麻生脳神経外科病院の病院長に就任．1996年に第1回「都留賞」，2025年に札幌医師会賞（学術研究賞）を受賞．

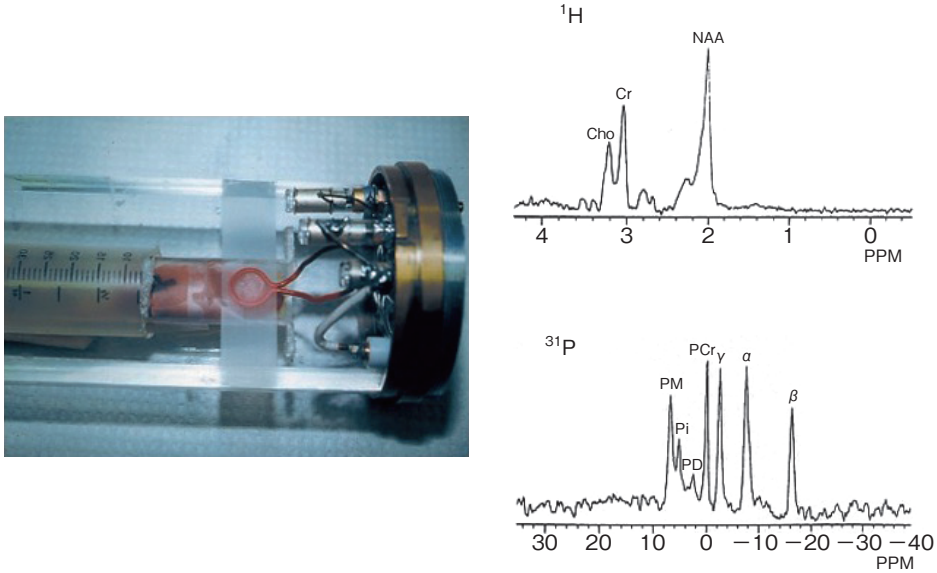
北大脳神経外科で脊椎脊髄の勉強を始める前に，研修医時代には関連病院において多数の手術経験を積ませていただきました．旭川赤十字病院では1年半の間に，開頭術を中心に222件を経験し，その後チーフレジデントを務めました．また，ポストチーフとして1年間勤めた釧路労災病院では，脳動脈瘤78例，脳腫瘍35例，頭部外傷36例，脳内血腫15例，脊椎脊髄疾患31例，そのほか43例，計238例を執刀しました．これらの経験は脊椎脊髄疾患の手術を行ううえでの大きな土台となりました．

脳神経外科の専門医を取得した後に，私が脊髄班を選んだ際には，岩﨑喜信先生，井須豊彦先生，そして秋野実先生がおられ，脊髄空洞症のS-S shuntを次々と改良されている時期でもあり，大変魅力的な分野に思えました．同期の小柳泉先生も同じ思いで，一緒に脊髄班に入ったのだと思います．小柳先生はその後，トロント大学に留学し，Charles Tator先生のもとで，脊髄損傷の素晴らしい研究を行い，現在でも脊髄損傷の診療に従事しています．

釧路労災病院から札幌麻生脳神経外科病院に移り，脊椎脊髄疾患の研鑽ならびに臨床におけるMRI，MR spectroscopyの学習を進め，途中の2カ月間はフィラデルフィア大学，フロリダ大学，カリフォルニア大学デービス校（UC Davis）にてMR spectroscopyを学ぶために短期留学する機会を得ました．さらに，UC Davisの中田勉先生のもとで約2年間留学し，7T，11TのMR spectroscopyを用いて，脳梗塞，低酸素脳症，脳の発達に従事し，米国の研究環境に触れつつ，最終的に7



1　北海道大学の歴代の脳神経外科教授
左より，都留美都雄先生，阿部弘先生，岩崎喜信先生.

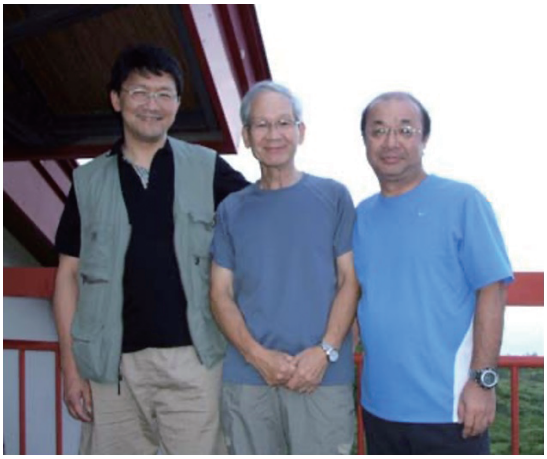


2　11T の MR spectroscopy を用いたラットの脳の発育

つの論文を仕上げることができました（**写真 2**）.

留学から帰国半年後の1991年より，北大脳神経外科のスタッフとして，頸椎症，頸椎 OPLL，脊髄空洞症，脊髄腫瘍，脊髄 AVM の診療，学会活動に精力的に従事しました．脊髄空洞症の治療法である S-S shunt および FMD の術式の改良，チタンケージを使用した頸椎前方固定術，脊髄髄内腫瘍への staged surgery，脊髄 AVM の治療方法などで多くの患者さんの治療に携わる機会を得ました.

学会活動としては，日本脊髄外科学会，日本脊髄障害医学会，Asia Spine，AO Spine などに関わってきました．中でも日本脊髄外科学会は，1986 年に日本脊髄外科研究会として発足し，1998 年より日本脊髄外科学会へと改組，さらに2006年には理事会制度が導入されました．私も世話人，さらに理事を経て，金彪先生の後任として理事長を務め，その後は髙見俊宏先生に引き継ぎました．本学会はまさに私のライフワークを体現する場でもありました.



3　白馬山の山小屋にて
左より，金彪先生，花北順哉先生，私.

4　2023 年の学会懇親会にて
左より，小柳泉先生，高安正和先生，私.

仕事ばかりしているわけではありません．北海道の山，北アルプス，中央アルプス，至仏山，霧島連峰などの多くの山に多くの友人と山登り，山歩きをいたしました（**写真 3**）．膝を痛めて手術を受けてからは，残念ながら山登りを諦めて，リハビリ代わりにゴルフを始めました．

髄内腫瘍の臨床調査は札幌麻生脳神経外科病院に移ってから開始いたしましたが，脳神経外科施設の中で最多の登録数を達成することができました．脊髄腫瘍の患者さんを現在でも多数ご紹介いただいており，年間60例ほどの手術症例がありますが，やはり圧倒的に患者さんを多く診ておられる整形外科の先生からのご紹介が大半を占めています．外来診察および手術が無事に終了した際には，必ず術前後の画像を添えて，ご報告申し上げております．

脳神経外科における脊椎脊髄の専門医制度は故岩﨑喜信先生・花北順哉先生を中心に検討され，脊髄外科医の育成を目的とした脊髄外科指導医・認定医・訓練施設制度が構築され，2003 年より運用されました．私も岩﨑先生のご指導のもと，金彪先生らとともに本制度の運用に携わりました．

その後，整形外科との共通専門医制度に関する議論が本格化し，2011 年以来，共同で歩んできた「脊椎脊髄外科専門医」の確立には，多くの労力と時間を費やしました．中でも，『脊椎脊髄外科専門医試験問題集』の第 1 版（2017 年）および改訂第 2 版（2022 年）は，山梨大学整形外科の波呂浩孝先生，双方の専門医の先生方のご協力のもとに作成しました．

このようにたくさんの先生方の参画により完成した制度ですが，中でも獨協医科大学の脳神経外科教授であった金彪先生，東京都立神経病院の脳神経外科部長であった故谷口真先生は，長年にわたり中心的な役割を果たされました．その後は髙見俊宏先生，下川宣幸先生，菅原卓先生らが本事業を継続してくださっています．

整形外科との関わりといえば本誌『脊椎脊髄ジャーナル』の編集委員を 16 年間務めました．特集の企画には毎回苦心しましたが，多くの読者に支えられ，大変やりがいのある仕事でもありました．

三輪書店さんとのご縁としては，故岩﨑喜信先生との『脊椎・脊髄外科疾患の外科』（2006 年），そして小柳泉先生との『脊椎・脊髄外科疾患の外科　第 2 版』（2023 年）の出版があります．北大の同門の先生方にお願いし，改訂作業がかなり遅れたものの，脊椎・脊髄外科を志す先生方，本領

今日一日　親切にしよう

今日一日　明るく朗らかにしよう

今日一日　謙虚にしよう

今日一日　素直になろう

今日一日　感謝しよう

5　今日一日の心がけ

6　筆者近影
患者さんが描いてくれた似顔絵.

域に関心をもつ医学生にとっても有用な教科書を完成することができました．日頃より敬愛する花北順哉先生（藤枝平成記念病院）より，「脊髄・脊椎外科の聖地から出された経典のごときテキスト」とのご評価を賜り，この言葉は忘れ得ぬものとなりました．

2013年から札幌麻生脳神経外科病院に院長として赴任いたしました．院長になって最もよかったことは，自分の理想とする形で仕事ができることです．外来は，月・火・水・金と週4コマに加え，毎週5件程度の脊椎脊髄症例を執刀しております．脊髄外科指導医は現在，私のほかに3名在籍しており，さらに北大のスタッフや研修医にもお手伝いいただいております．

手術に際して心がけることは，安心・安全で，かつ低侵襲な手術を行うことです．不要な合併症を起こさないことはきわめて重要です．一方で，難しい症例に対しては「鬼手仏心」の心構えで臨むことが必要だと考えております．また，人との関わりについては，**写真5**に示すような姿勢を大切にしていきたいと思っております．

私も今年6月には古希を迎えますが，健康に留意しながら，今後も脊椎脊髄外科の診療を続けてまいりたいと考えております．